

博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名 中澤 資裕
学位 博士（文学）
学位記番号 新大院博（文）第64号
学位授与の日付 令和4年3月23日
学位授与の要件 学位規則第3条第3項該当
博士論文名 近世の神社神道と組織—越後国を中心に—

論文審査委員 主査 教授 原 直史
副査 准教授 中村 元
副査 教授 堀 健彦

博士論文の要旨

本論文は、17世紀前半から19世紀前半という、江戸時代の大半を対象に、越後国を中心とした神社神道と組織の展開を窺うものである。全体は6章構成とし、そのほかに研究史と本論の関心を述べた序章、それに今後の課題を記した終章を置いている。

本論文は以下の通りの構成で成り立っている。

序章では戦前から戦後にかけての神社神道の研究史を概観し、1980年代に大きなパラダイムの転換が起こる前、戦後期にもかならずしも研究が衰退したわけではないが、戦前の枠組みから抜け出すことが出来なかったとの見通しを得た。

第一章「社家組織の消長—越後一宮弥彦神社に注目して—」では、越後一宮弥彦神社（西蒲原郡弥彦村）の社家へ伝来した文書群を素材として、世襲神職の組織が戦乱を経てどう発展し、また行き詰ったかを検討した。慶長3年（1598）上杉景勝が会津への移封になると、神社領（神領）の庇護者は一時的に空白になり、しばらく旧に復されなかった。やがて弥彦神社は藩や幕府から社領を安堵され、次第に社家組織は人数を拡大した。身分的にも、神職だけでなく非宗教者まで組織の範囲を広げて充実させた。しかし、旧例に基づいて身分を継ぐのが前提の世襲神職にとって、組織の拡大は歓迎されることばかりではなかった。それがもっとも鋭く表れたのが、明暦4年（1658）に時の神主が死去し、残された幼年の遺児の後見役をめぐる起こった神職間相論であった。幕府寺社奉行所へ訴えられたこの相論を検討し、組織の拡大につれて神主権威が高まり高級社人の不満を生んだこと、やがて組織的にも歪みが生ずる一因となったことを論述した。

第二章「橘三喜と祖先祭祀」では、市井の神道家橘三喜（1635～1703）に注目し、彼の神道説のうち祖先祭祀に注目して考察した。三喜の唱えた神道説は神仏一致的で、天照大神を信心することで万人の救済を説く特徴的なものであった。彼の周囲には4,700人の門人が集まったとされ

るが、なぜ彼の神道説がそれほど歓迎されたかの実態は明らかにされてこなかった。本論では弥彦神社神主の高橋光頼や越後国長岡藩主の牧野忠辰などの動静に注目し、元禄7年(1694)～9年頃に長岡城下で三喜流の祭祀が流行をみたことを明らかにした。また、その先頭に藩主の忠辰自身が立ったこと、ほどなくこの現象が瓦解した理由に神主高橋光頼の神領からの追放があったことも解明した。

第三章「垂加神道と地域社会—越後国新潟町に着目して—」では、従来ほとんど研究されてこなかった越後国での垂加神道の展開について考察した。とりわけ、18世紀中頃に蒲原郡新潟町にあった知識人グループについて、竹内式部の手紙などを手掛かりに誰が、何を動機に集まったかを考究した。その結果、高田敬典という医家でもある人物が新潟町の垂加派で中心になったこと、神道の本所吉田家が垂加神道家の松岡仲良を学頭に迎え、そのことが地域で垂加派が拡大する要因になったこと、やがて村松藩や新発田藩といった公儀の藩主がこの思想に傾倒し、藩論になるとかえって影響力が低下したことを指摘した。

第四章「近世後期の地域神職と組織—越後国古志郡三宅神社の神職・星野大内蔵に注目して—」では、古志郡三宅神社(長岡市)の神主星野大内蔵に注目し、彼が集積した古志郡や魚沼郡の神社と社家の由緒等をひとつの梃子に京都の本所吉田家との間を取り次ぎ、神職間で権威の上昇を遂げたことに着目した。そのうえで、延長5年(927)成立の『延喜式』神名帳に載る神社(延喜式内社)に大内蔵が注目し、やがて「式内治定神主」として当該の神職を組織化したこと、地域へ本所の権威が浸透すると反発を生み、組織が瓦解した経過を明らかにした。

第五章「近世後期の在地神職—吉田家江戸役所の地域的展開に注目して—」では、吉田家が江戸に設けた出張所(江戸役所)が執行した寛政9年(1797)の諸国神祇道取締りに注目し、出役人の下向前に既存の幕藩制度を利用して在地での本所権威の浸透を図ったこと、その背景には白川家との競合があったことを指摘した。また、やがて下向した出役人が権威を揮い、在地神職から出される様々な願い出を請け負ったが、その内実は京都との間の取次役で、第四章で注目した星野大内蔵と実質的な違いがなかったことを説明した。

第六章「吉田家江戸役所と気吹舎—越後国神職の動向に注目して—」では、吉田家江戸役所が文政9年(1826)に執行した再度の出役(諸国神祇道見廻り)に注目した。その内実は、国学とりわけ平田篤胤とその一派(気吹舎)の勃興に対応したもので、出役人が実は篤胤に加担する蒲原郡沼垂町(新潟市中央区)の神主(上田要人)だったこと、彼は参集した地域神職に気吹舎の高弟(上杉六郎)への師事を勧めたことなどを指摘した。また、平田篤胤の周辺で起こった神職の組織化が、やがて幕末の政治化を引き起こす一因となったとする先行研究の指摘を否定し、その遠因は配下の宗教者を一元的に組織化する意思を持ち、実力も保持していた江戸役所にあったことを指摘した。

終章「神社神道と組織の行方」では、第六章で出役人または国学者として立ち現れた上田要人・上杉六郎が天保期(1831～44)になると時代の波に洗われて力を喪失したことに注目し、その原因を探り、今後の課題を見通した。

審査結果の要旨

本論文の何よりの特長は、近世の全期にわたり、関連する文献・史料を博搜し、これまで全く

知られていなかった事実も含め、神職、あるいは信者が、いかなる契機から神道的言説に基づくどのような集団化を遂げ、あるいはそれらが矛盾を抱えて崩壊していったのかを、広範に明らかにした点にある。もとよりそれら集団そのものの中心的な範囲は、越後国内に限られているが、幕府により神道の本所として保護された京都の吉田家のみならず、橘三喜や、垂加派、平田派などの門人獲得の全国的な動きにひろく目を配り、立体的な視角からその時々形成されたネットワークのありようを明らかにしたことは、今後他地域の神社神道を検討するにあたって、参照されるべき成果であると、高く評価される。また、組織化の契機として、それぞれの神道説の内容自体に踏み込んだ解釈を試みている点も、評価しうる成果としてあげられるであろう。

もっとも中には、関連史料の少なさから、説得力にやや欠く論旨の展開となっている部分も、少しではあるが見受けられる。しかしこれらも、逆にみればひとつの仮説の提起として、今後の研究の展開を促す意味合いを持っており、本論文の学術的価値を損なうものではない。

なお、本論文は、オーソドックスな文献史学の成果であることから、博士（文学）を授与するのが適当であると判断される。

以上の審査結果から、本論文審査委員会は、全会一致で、本論文が博士論文としての水準に達しており、博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断した。